

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報

NO. 42 2006. 8. 20

オートルート滑降 上田忠士

マッターホルンも少し大きくなってきた。約2時間の緩やかな登りでツエルマットを見晴らす標高（3660m）の雪原の丘に立った。ここでもう登ることはないのだと思うとう



れしくなる。ヨーロッパアルプスの奥深く、この雄大な大雪原に自分がいることが信じられぬぐらいの世界である。もう2度と見ることはないであろうこの景色を眼に焼き付け、写真に収めスキー滑降にはいる。雪の状態はよく、最初は傾斜も緩く大きなターンを繰り返し快適に滑る。広いようでも滑走コースは限られているようで、ガイドの跡を忠実に滑る。外れるとガイドが大きな声で注意をする。（本文より）

テントピーク登頂とアンナプルナ山群を巡る 佐々木惣四郎

翌朝5月7日午前3時起床。3時45分出発。テントはバリバリに凍っているがマイナス5-7度ぐらいの感じ。なんと言う事のない雪のスロープを登っているうちに5時30分頃真っ赤な朝焼けがピークの背後に現れ1回目の感激。一步毎に一呼吸のペースで行くのだが傾斜がきつくなるとゼイゼイと喘ぐ。稜線に出る雪壁の下 5100Mに7時頃着き、約40度のスロープで約200mをピッケルにてキックス テップで稜線に出る



ヨーロッパアルプス

「オートルート Haute Route」

を歩く

2006年5月

S40年卒 上田忠士

フランス、モンブランの麓からマッターホルンの麓までヨーロッパの屋根に延びる雲上のスキーツアーコースを歩く。これは私が北海道で山スキーを始めた時からの夢であっ



た。

今年(2006年)4月のコースに挑戦した。

現地シャモニーのフランス人ガイドに案内され、山小屋泊まりを繰り返し、総勢6人のグループであったが、天候不良、メンバーの体力不足から途中カットし、完全踏破にはならなかった。しかしヨーロッパアルプスの奥深くに入り、アルプス山岳スキーの真髄を見た思いがした。

出発前日は足慣らしと時差、体調調整のためロープウエーでエグューデミチー(3842m)まで上りバレーランシユ、メールドグラス2氷河を快晴の中、針峰群に囲まれて滑走したが楽しいものであった。今日の高度差2000m、距離15、16kmであったが急斜面あり、雪質も種々ありスキー技術のテストのよつなものであったろう。

翌4月9日、オートルートが始まる。フランスシャモニー近くのアル

ジェンチエールスキー場のキャビンに乗り、グラモンテ(3233m)からアルジェンチエール氷河への滑降から始まった。オートルートは氷河をスキー板にシルを付けて登り、またスキー滑走を繰り返し、コルを越え山小屋6泊を経てスイスツエルマットに滑りこんだが、難所のシャルドネのコルは悪天候のため越えられず、またコース中最高所のピンダローラ(3796m)の頂上に立つこともできなかった。天候の悪化と強風、頂上手前の急斜面のトラバースはバリバリの雪の状態で通過を断念せざるをえなかった。ピッケルとアイゼンの世界であった。

ここを引き返し、昨夜泊まったチス小屋を通過し、急な斜面とハシゴをスキー板を担いで登り、チャオレのコルを越えてアローラに滑りこんで、泊まりとなった。ここは予定にない泊まり場所で小さなスキー、登山基地になっているようだ。夕方が

ら青空も見えて来たので、翌日ベルトールのコル(ベルトール小屋がある)に向かうことにした。アローラの少し上流からシルをつけて登り始めるとモンコロンが正面に見え、ピンダローラのなだらかな頂上が美しい。夕々の好天気のため歩いても気持ちがいい。何パーティかに追い越される。彼ら西洋人の歩きは速い。左に大きく曲がり、高度感あるトラバースを終えると、ベルトールのコルが遠望された。ここで小休止、今日の行程の半分といったところである。あとは氷河の中を緩斜面からコル直下の急斜面へとひたすら登る。

高度差1300mの登り、約5時間でコルに着いた。わわれの目標地マッターホルンの上部が遠望される。コルの岩陰にスキー板をデポし、鎖の岩場、急なハシゴを登り、ベルトールの山小屋(3311m)に到着していた。建て替えられた新しい山小屋であるが、よくもこんな崖の上に建

設したものと思う。ベルギー人と同じテーブルで食事、明日はツエルマットに滑るだけの最後の夜だと思っとなんともなかなかな鬱陶気になる。満天の星が明日の天気を保証してくれている。

最終日(15日)の朝を迎えた。朝日を浴びて針峰がモルゲンロートにかがやいている。

薄暗い中、小屋を出発。危険な右場を慎重に下る。スキーを装着し、コルから滑り始めた時は明るくなっており、この広い雪原にわれわれ6人だけだ。10分くらい滑り下りたところでシルを付け大雪原を東のマッターホルンに向け、ガイドの跡を付いて歩く。シュプールの秀峰が残っている。ダン、デフンの秀峰が輝いている。マッターホルンも少し大きくなってきた。約2時間の緩やかな登りでツエルマットを見晴かす標高(3660m)の雪原の丘に立った。ここでもう登ることはないの

だと思つてうれしくなる。ヨーロッパアルプスの奥深く、この雄大な大雪原に自分がいることが信じられね



ぐらいの世界である。もう2度と見ることがないであろうこの景色を眼に焼き付け、写真に収めスキー滑降にはいる。雪の状態はよく、最初は傾斜も緩く大きなターンを繰り返して快適に滑る。広いようでも滑走コースは限られているようで、ガイドの跡を忠実に滑る。外れるとガイドが大きな声で注意をする。

ヒドンクレバスがあるからだろう。クレバスの横、青氷の出ているところ、小さな窪みの通過などを繰り返す、全く気が抜けない。うっすらとスキー跡もところどころに散見される。大雪原からツムト氷河に入るところは急斜面が続く緊張する。転倒しないことだけに集中する。ツムト

氷河に入ると、左岸、右岸とクレバスを避けて滑る。ガイドのルートフラインチングはミスがなく、すばらしい。

マッターホルンの姿が大きく変化し、北面から東面が見えてくる。長い、長いツムト氷河の右岸の緩やかな斜面を下りバス気味に滑走し、対岸のションビルヒュッテが小さく見えてからも長い。スタッフェルにやがて到着して、皆でビールを飲む。ここはもうゲレンデスキーヤーの世界だ。振り返るとマッターホルンの見なれた姿が高く聳えて、われわれが滑ってきた氷河もその下に見える。

フリーを過ぎ緩んできた春の雪を滑りツエルマットに滑りこんだ。高度差2000m、直線距離約20kmの滑走であった。7日間の行動と氷河の急斜面、悪雪、長い滑りは私の体力、スキー技術の限界であり、ツエルマットでスキー板を外したと

きは本当にほっとし、私のオートルートは終わった。

翌日はツエルマットのガイドの案内でオプピステスキーを楽しむ。シャモニー経由帰国の途についた。



アンナブルナ連峰(5峰)に囲まれた テントピーク(5663M)への旅

2006年4月29日～5月11日

佐々木惣四郎

カトマンズの状況

4月28日外出禁止令が解かれ騒乱が一旦静まったばかりのカトマンズに入る。市内は静かで少なくともタメル地区は通常であったが人は少ないようだ。旅の終わりに判明した事であるが、観光客はガタ減りで、それも欧米人はかりで、アンナブルナ内院でも1日15人ぐらいで日本人には1人会っただけである。ほとんど全部がバツティ泊りのトレkkerで登山バティは 帰りに会ったポーランド隊と小生の1人旅だけであった。なお、テントピークに7バティ入り 4バティのみ成功との情報であった。

アンナブルナベースキャンプより頂上へ

5月6日キャラバン最終地点であるアンナブルナBC(4130m)より朝7時出発、

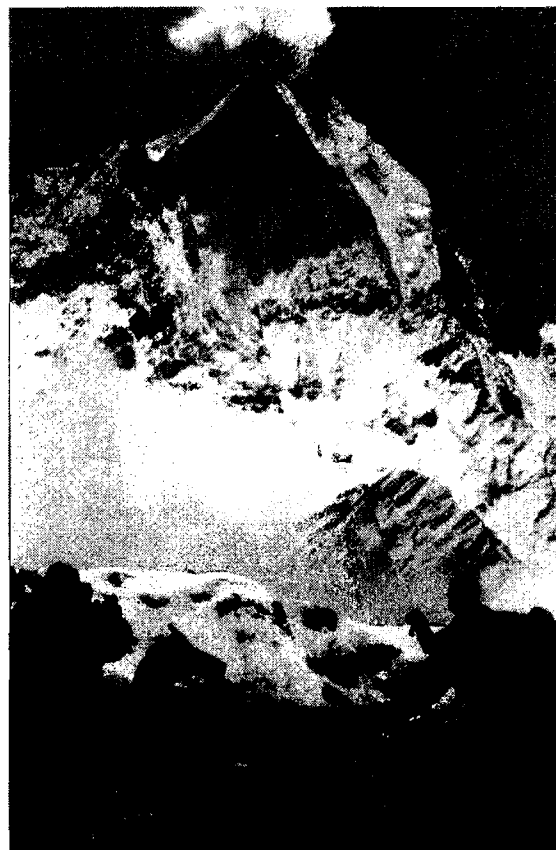
アンナブルナ大氷河を横断して対岸の尾根に取り付く為、総勢7名(シエルパ、コック、ポーター等6名)にて雪の凍る土手をザイル張って下り、2時間

かけて氷河を渡り、極めて危険なガレ場を超えて13時頃整地を終えて、4500Mにベースキャンプを設営した。眺望は マチャブチャレは みえたがさ程良いものではなかった。

翌朝5月7日午前3時起床。3時45分出発。テントはバリバリに凍っているがマイナス5-7度ぐらいの感じ。なんと言う事のない雪のスロープを登っているうちに5時30分頃真っ赤な朝焼けがピークの背後に現れ1回目の感激。一步毎に一呼吸のペースで行くのだが傾斜がきつくなるとゼイゼイと喘ぐ。稜線に出る雪壁の下 5100Mに7時頃着き、約40度のスロープで約200mをピッケルにてキックスステップで稜線に出る。

頂上がやつと眺められたがまだまだ遠く頂上直下が同じようなスロープで続いている。雪が柔らかくてもぐりなかなか進まないが素晴らしい景色である。9時45分バテ気味で頂上に立つ。頂上は極めて狭く2人座って一杯で、辛うじて記念写真をとる。

360度のパノラマで、アンナブルナ連峰が周りにズラリ。この素晴らしいカラバタール以上の感激。



アンナブルナI峰8060m アンナブルナBCより

アンナブルナI峰(8091m)の左側はアンナブルナ南峰(7219m)とヒウンチュリ(6441m)があり、右側はカンサルカク(7485m)、タルケカング(7232m)シングチュリ(6501m)があり、このテントピークの尾根はシングチュリへ続きI峰の主峰に連なっている。

タルケカングの右側にはガンガブルナ(7454m)アンナブルナIV峰と続(7553m)アンナブルナIV峰と続き、最後にマチャブチャレ(6993m)が正面に来る。マチャブチャレはヨロップのマッターホルンを2倍にした感

じで鋭い三角形の90度の岩壁を見せている。

こんな迫力のある景色にはお目にかかれたいのではないか?これらの山々が地図上では5-8キロに近さにあり、遠くに望める程度ではないのである。

頂上からはマチャブチャレが少し低く見える様になったが、6時間の登行は少々きつく、下りは2時間でベースキャンプに着いたが、雪が腐ってダンゴになりバテてしまい、昼飯も食べられない有り様。9年前にエクアドルのチンボラッソ(6300m)に5000mから1

1時間かけてアタックした時も滅茶バテた事を思い出された。

このあとすぐにアンナプルナBCに2時間かけて500mの下山をした。結局1100mの登りと1600mの下山の10時間行動となり夕飯もおかゆだけであった。

特にピッケルを散々使用した為、腕と背骨がこつて、上半身にダメツジとなり気分が悪くなったのかも知れない。疲れと高度の影響も出るようだ。

昼からはどうしても雨模様となり12時頃ついてPM1時にテント出発して3時に着いた。

アンナプルナ峰8000m峰の可能性について

内院方面よりは極めて困難な壁で近々3隊が挑戦するも全て失敗している。5月8日ポーランド隊4名が、テントピークの同一稜線を経てシングチュリ6500mを超えての挑戦を開始した。シエルパなしのハイポーターのみの使用による挑戦でルートが長く、体力と天候がポイントと思われます。そのかわり技術的に難難な箇所はないように思われます。

アンナプルナ内院トレッキングについて
ゆっくり行って行き5日帰り3日で

アンナプルナBCにつく。ただし、着くまでの景色は望めず我慢と辛抱のキャラバンになります。アンナプルナBCにはその値打ちがあると思います。ここは素晴らしい展望台でマッターホルンの2倍あるマチャプチャレが正面にあり、背後は1峰主峰の岩壁でいずれも近くにあるので迫力があります。

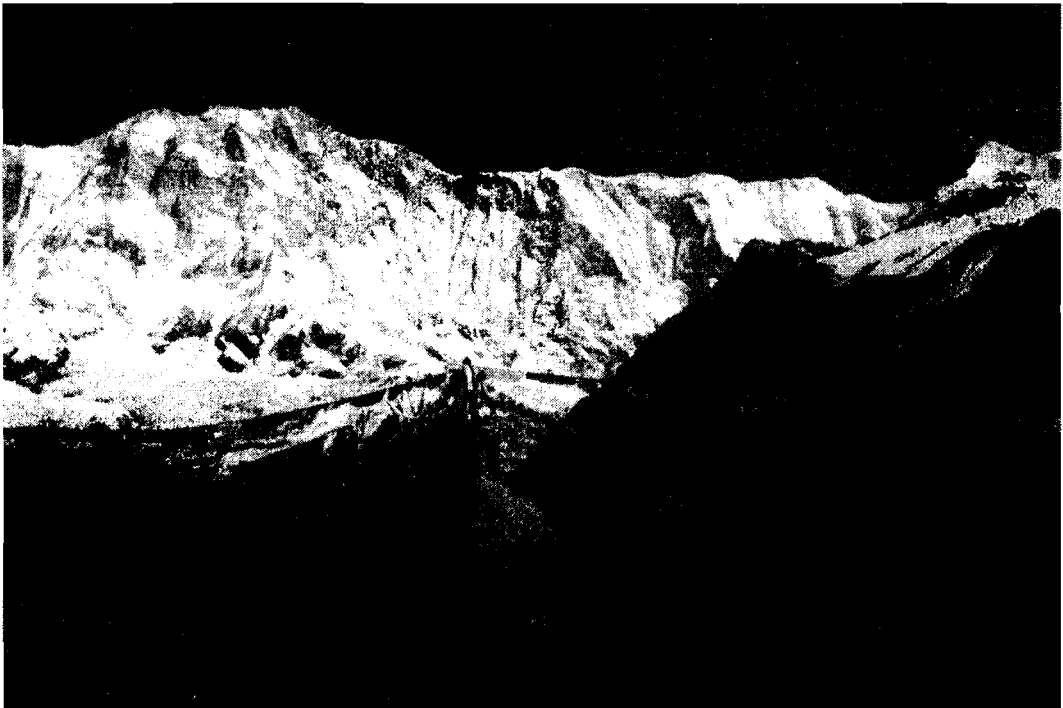
5月の花を期待するもチョムロンよりの石楠花とマチャプチャレBCからABCへの

さくら草が華やかで、道中のいろいろな鳥とシャウリバザールではホタルが沢山いて(50匹以

上) バッティ泊りで十分に行けます。また道中土石畳の階段が多くチョムロングの前

後は40分以上の階段があります。

今回は無理して出たのですが素晴らしい眺めに会えて幸せです。2年前にアンナプルナ外院から
ジヨムソンにでたので裏側も見た訳で地形がよく理解できました。



テントピーク頂上とマチャプチャレ

2006年5月

西穂高山行報告

現役 藤井 陽介 和田 典之

5月2日

現役は20時にバンをレンタル、集口場所である

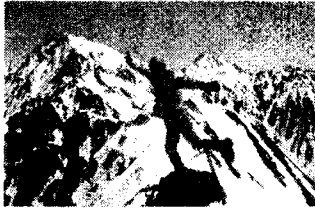
「深山荘」前駐車場に向かつて出発。茨木で和田君を拾って名神高速に入り、そのまま飛騨清見へ。塩見さんにだいたい連続して運転してもらった。降りる頃にガソリンがあまり無いことに気付く。心配症な小椋君がいつも通り心配する。高山駅のコンビニで親切なおシサンが24時間営業力ソリンススタンドの場所を教えてくれたので寄り道する。

普通に気のいいおシサンだったなあと思っていたら、近藤さんが「あのおシサン、どこから声出してたんだろね。頭から声が出たみたい。いゝるんるん」あくあ云っちゃったよこの人は。云わないように暗黙のうちに了解されていたことを「おシサンの価値が、だいたい下がってしまった」。

そんなかんだで、日の出と同時に駐車場に着く。みなさんほとんど寝ていない。

5月3日 晴れ

7・15(新穂高温泉)8・15(穂高平避難小屋)8・20(尾根取付)10・50(1943m付近で大休止)11・30~12・00(登山口)
車内で仮眠を取ろうかと思っても寝れるわけがなく、ほ



NISHIHO の N

ほぼ徹夜状態で伴サン・山田サン・兵頭サンと合流し、ゆっくりに準備して出発する。準備の状態からすでにキツイ。頭はボケて使い物にならなかつたが、それなりに体は動くものであった。何も考えずに歩いていたらいつの間にかテント場に到着してしまった。山田サンはまだ登りたそうだったが現役が目で訴えた・・・。

もう登らなくていいと思うと元気が出てしまつて、テント建てた後、とても大きなトイシを作ってしまった。大山に行った時、吉村さんが「女性用トイシ掘ってあげなきゃダメよ」なんて言っていたことを思い出したので、もう一つ掘る。男性用トイシより大きく作ろうかと思つたが、怒られそうだったので辞めた。

トイシ掘りが楽しかった為か、テントに戻っても寝れない。こういう場合は小椋君と暗い話をする。「生きていくの苦しいよね」なんて話していると、周りから野次が飛んでくる。世の中の人には悲観的な人間を嫌うのだろっか。

いつの間にか夕方になり、ペミカンカレーを作る。吐きそうになる。塩見サンと小椋サンが最後まで食べてくれたので助かった。

歯磨きをして、明日は晴れそうだな〜楽しみな〜と思いつつ寝る。



NISHIHO の S



NISHIHO の I

5月4日 晴れ

4・30起床〜6・00(出発)9・30(西穂高山頂)10・30~12・40(テント場)

朝食はペミカンラーメン。自分の作ったペミカンなら、自分の好みに合わせているので食べやすい。準備して出発。高度が上がるにつれて乗鞍岳や笠ヶ岳なんかが見えてくる。『他の山の名前わかんない』。1・5時間くらい尾根上を登った後、兵頭サンに導かれて大きな沢を渡る。見た目より長かったから、途中で気分的に疲れてしまった。

再び稜線に出、少し休んで山頂を目指した。途中で電鳥のつがい(ひよこひよこ)現れ感動。丸々可愛いわ。写真撮ろうと思つたら滑落しそうに谷に喰われかけた。危ない危ない、電鳥に殺されかけた。

山頂に着く少し前に、山田サンが先頭を譲ってくれたので、山頂からの眺望をありがたく頂戴いたしました。山頂からの眺めは素晴らしいものだった。南・中央アルプスとはひと味もふた味も違つて見えた。また来たい、と思つた瞬間でもある。奥穂高や槍がおいでおいでとフコールを送ってきたが、「また今度ね、バイバイ」とフツてあげた。名残惜しみますに涙ぐみ立ち去るのがミソである。



NISHIHO の I



NISHIHO の H

下山途中、兵頭サン山田サンによる懸崖下降の練習をする。初めてだった為か、わくわくして面白かった。それと同時に、「こういうことできないと、まともな山登れないなあ」と実感した瞬間でもあった。一ヶ月前に南アルプスに行った時、北岳を諦めた苦い経験の思い出す。今度の冬こそはザイル持って行くと、と心に思う。

下りは伴サンが早い。やはり年季が違うなと、すばすば雪に足を取られながら思っていた。テント場に書いて適道に過ごす。テント内が籠っていたので外で本を読もつとしたら、伯父さま達とマドモアゼルに捕まってしまった。しかし、そのお陰でひとつ単語が増えた。「心びら」心斎橋をびらびらすことになった、よかった。夕飯はベミカン豚汁。これもまた食べるのが辛かった。水を多めに入れなきゃダメですね。

個人的感想

実は北アルプス自体行くのが初めてで、雪の量と眺望に驚きました。時間があれば独りで縦走してみたいとも考えてます。南・中央アルプスも春にしか行ったことがない為、他の時期にも行ってみたいと思いますし、当分の間は興味が尽きることはなさそうです。しかし、5/7に和田君宅へお邪魔したことが一番印象に残っていると云う・・・。

あ、自分はまだまだ力不足なあと感じてしまった。なんとか。



NISHIHO の H

5月5日(金) 和田典之

今日は下山の日です。テントの撤収にはもう少し時間がかかるかと思いましたが、今回はまずまず迅速にできたのではないでしょうか。途中雪中訓練を行いました。あまり思ったようには止まらなかった。

雪質の影響もあったようです。2時間半程度で下までたどり着いた後温泉に入ることになりました。露天風呂で皆さんゆったり入浴してましたが、入浴時間の短い僕は半身浴であまり中に入らずにのんびりしていました。その後買い出しに行くことになりましたが、いつものことながらかなり大量に買い込んでいました。こんなにたくさん食べられるのかと思いましたが僕は食欲が違つので静観していました。その後の食事ではアルコールをいつもより多めに飲みましたが、特に変化は生じなかったようです。少しすつなら案外大丈夫なのかもしれません。

個人的感想

他の人と同じになるかとは思いますが、天気が良かったので良かったと思います。5日、6日はのんびりすることもありましたので。個人的にはベミカンを使わずに終わってしまったのがちょっと痛かったです。

五月山の感想 (小椋 剛)

今回の一番ありがたかった事は、合宿参加メンバーが率先して計画に協力してくれた事です。そして、合宿中、部員間で嫌な空気が流れる事がそんなに無くて、程々の良い雰囲気具合で宿中ずっと続きました。また、皆、西穂



NISHIHO の O

西穂を楽しんで登れたようで、次もまた山へ行こうという、山岳部として良いムードになりました。そんな訳で、今回の合宿は、今までの大半の合宿と違って、今後の山岳部としての活動に「大きな」希望が持てるものとなったと思います。

「五月山の感想」 堀見 肇

修士論文の作成でかなり体力を消耗したので、今回の山行には体力的に不安がありました。が、実際に登ってみるとそれほど体力は落ちておらず、よかったです。僕にとって関君が抜け近藤さんが加わった初めての山だったので、新鮮でした。予備日を使わずに済み、そのため丸一日にユッケ雪線や駒ヶ根周辺で過ごすことができた山とはまた違った楽しみが味わえました。

和田君の家に行かなかったのが今回僕の犯した唯一最大の失敗でしたが、これからもっと山に登ろうと改めて思った有意義な「ゴールデンウィーク」になりました。

「五月山の感想」 近藤 由佳

天候に恵まれ、本当によい山行でした。歩いたコースも変化があって面白かったし、西穂高山頂からの景色も最高でした。出発前はいろいろ不安もありましたが、行ってみると不安も消えてしまいました。ただ、体力が足りないのも、少しきつい登りが続くと辛かったし、足が抜けやすい場所は歩きにくく大変でした。今回は女性用トイレをつくってくれたりと、やっぱり女性ということでも男子部員やOBの方々には気遣ってもらったのかなあと感じます。いつもありがたうございます。これからもよろしくお願いします。

山スキー お勧めと危険について

昭和56年卒 田中博之

ことしもGWには山スキーを楽しませていただきました。好天に恵まれて、計画通りの山行を行うことができ、誠にラッキーだったと感謝しております。実は久しぶりのテントを担いでのスキー山行で、体力の衰えをヒシヒシと実感した山行でもありました。重荷を背負ってスキーをするのはけっこうつらいものがあります。急斜面で素早い切り返しを要求されるときに、脚力がなくスキーの抑えが効かない状態となってしまうのです。

わが市大山岳会ではいつまでも若手ですが、ぼくも50才になろうとしております。定年を過ぎて厳しい山行に頑張っておられる諸先輩には怒られてしまいますが、もうスキー幕営山行はできないかもしれないという危惧もあります。それでいままでに行ったスキー山行であまりガイドブックには紹介されていないところを、総集編としてまとめてみることにしました。

清水谷二俣上部 白馬尻から登り大雪溪、下り杓子沢、小日向のゴル経由で日帰り

柳又谷のスキーを狙いながら天気が悪く、一日の好天をとらえて行きました。静寂でいいコースです。

柳又谷源流、旭岳北西稜登り返し、稜線を猫又山付近、大ナル谷、ナル谷乗越、柳又谷横断、赤勇谷、朝日岳

登り大雪溪、下山は蓮華温泉、平岩

柳又谷クラガリ峽はデブリだらけで滑ってもおもしろくないだろうとの予想で、クラガリ峽をバイパスしました。旭岳北西稜に登り返して北西面のレンゲ谷を滑って清水岳に登り返す予定でしたが、季節はずれの降雪で雪崩を恐れてレンゲ谷には入らずに稜線を行きました。大ナル谷源頭では清水岳寄りには雪庇が大きく、猫又山に近付かないと滑り込めませんでした。つまり、予定通りに清水岳に登り返しても多少は稜線をスキートラバーゼンすることになり、ハイマツのブッシュに苦しみます。あとは問題になる箇所はなく柳又谷もスノーブリッジで横断可能で、朝日岳への登り返しも楽しいものでした。

御山谷、2,056m 独標下のゴル、中ノ谷、刈安峠、五色が原、ヌクイ谷上部、越中沢岳東尾根、廊下沢、黒部川、スゴ沢、薬師岳まで縦走、薬師沢右俣、薬師沢左俣左岸尾根、北ノ俣岳、神岡新道

立山から槍ヶ岳までスキーで行く日本オーソルトはほとんど滑りを楽しめないもので、いくつかの谷をつないでみようと計画しました。これはその前半です。問題は黒部川が切れていたから失敗することです。廊下沢出合は崩壊しかけのスノーブリッジで黒部川を右岸へ。さらにスゴ沢出合は完全に埋まっており容易に左岸へ。薬師沢右俣は出合付近で切れていましたが、簡単に巻きました。廊下沢出合の状態が心配ですが、大雪の年ならお勧めです。

槍ヶ岳までの後半も仲間内では実行されましたが、都合で参加できませんでした。

雄山、御前谷、立山中央稜、2,279m 独標下、内蔵助平、ハシゴ谷乗越、北股、小窓、西仙人谷、白萩川、フナクラ谷、折尾谷、西谷、平杖乗越、毛勝山、東又谷

御前谷は滝があり下まで滑れません。2279m

独標下を乗越すとわずかな登り返しで内蔵助平に入ることが可能です。ここまではお勧めです。

小窓を越えて西仙人谷は上部が急、下部はデブリだらけでおもしろくありません。

このときは白萩川が取入口まで滑降可能でした。通常は鷹のスワリゴルジュで雪が切れます。それほど大雪の年でしたが、折尾谷は小黒部谷の手前で切れ、西谷までスキーを担いでやぶごぎさせられました。かなり悪趣味コース。お勧め度は低いです。おまけに毛勝山への登りは雨でした。

唐松岳→鯉鬼谷上部→白岳→シラタケ沢→カク木里→キレット沢→キレット越えで鹿島槍→鹿島槍南東面の沢→棒小屋沢→種池小屋北西の尾根→扇沢

スキーを担いで兼用靴でキレットを越えるのは恐ろしいものでしたが、鹿島槍の南東面は極楽スキーで、棒小屋沢との出合も完全に埋まっております。鹿島槍の頂上までスキーをあげるのによさそうなコースがあればお勧めです。扇沢はひどいぐしゃぐしゃ雪で滑るとシユプールあとが雪崩れて不気味でした。

奥大日岳→小又川カスミ沢→大日山沢→大日岳

奥大日岳からの滑り出しは雪庇の切れ目を見つけてはいります。劔岳を正面にした滑降が魅力。大日山沢の出合まで雪は切れていません。

問題は奥大日平から称名滝までの下りが滑れないことです。せつかくの下りなのに滑れるだけの雪がありません。大雪ならいけるといふ噂もありますが。

雄山→御前谷→内蔵助平→北股→池ノ平(三ノ窓往復、池ノ平山往復)→小黒部谷上部→大窓→白萩川

有名な劔岳一周コースと御前谷を合体させただけで、目新しさはありませんが、景観のよさは抜群でお勧め度は最高位です。三ノ窓往復は厳しいだけでやめた方が賢明です。

槍沢→氷河公園→横尾本谷→溜沢→奥穂高岳→白出沢

GWには小屋を利用していきます。でも上高地から槍沢ロッジ付近まで行かないとスキーは使えません。横尾本谷は人がおらず快適です。白出沢も人はいませんが、大滝をスキートラージンで巻かねばならず、全く快適ではありません。

ません。あとは人だらけです。

スキーの観点からは文明の利器で高度を稼げ、雪も多い立山方面がお勧めでしょう。

雄山→御前谷→内蔵助平→北股→池ノ平(池ノ平山、仙人山往復)→小黒部谷→折尾谷→ブナクラ乗越→猫又山→猫又谷

ことしのコース。大雪だったので今度こそ小黒部谷はつながっているにちがいないと信じて行ってみました。残念ながら折尾谷との出合は切れていて崩壊寸前のスノーブリッジ渡りや雪壁登り、スキートラージンでのへつりとやぶごぎなどいじめられました。おまけに大窓への谷をわけて、少し滑るとデブリだらけでお勧め度は低いです。ブナクラ乗越から猫又山への登りは2,000mくらいまでスキートラージンでしたが、劔岳の景観はすばらしいです。池ノ平山、仙人山は景観、スキーとも最高でした。小黒部谷での苦行をものともしない方には景観の上からは超お勧めコースです。

わが市大山岳会では柵池でスキー合宿が行われていますが、ぼくはたいがい都合が悪くて参加できておりません。申し訳ありません。またHP

には山スキーの記録も見られます。山スキーは雪山を相手にする方法としては比較的体力がなくてもできる山行形態だと思います。ズツポやわかんでは苦しいラッセルもスキーなら楽チンです。つまり老人向け雪山登山方法です。わが山岳会の(よそもそうでしょうが)高齢化を考えると、山スキーを始める方は増えるにちがいないと思っております。

でも、山スキーはけっこうリスクも大きいです。通常の雪山登山よりも雪崩に遭う可能性が格段に高いです。ぼくも妙高外輪山への山スキーで足元から雪崩れて間一髪という目に遭っています。当日は大雪の翌日で無風快晴でした。こういう日もっとも危ないのです。こっちは大雪で4月にやたらと雪崩による遭難の報道がありました。

山スキーをする方はビーコン、スコップ、ソンの3種の神器を携行して山に行ってください。できれば雪崩講習会などに参加するのがよいようです。噂では怖くなって山スキーなど辞めてしまうので非常に有効なようです。ぼくは今年参加予定でしたが、仕事が休めずに参加できませんでした。それで、まだ怖くならず山スキ

ーを続けています。

ことはGWでもかなり雪が多くて、谷底を歩いていると兩岸の雪面に亀裂がたくさんありました。この亀裂が崩壊するか否かは多くは運の問題だと思いますが、やばそうなところは早く通り過ぎるのが原則です。

もうひとつのリスクは滑落です。スキー技術を磨くことと実力以上の無理をしないことでこれは防げます。山スキーに必要な最低のスキー技術はグレンデの上級者斜面をどんな条件のときでも、つまりアイスバーンなどでも転倒せずに滑れることだと思っています。滑り方は問いません。最近のスキーの用具が改良されて、上記の技術程度ならすぐに獲得できるようです。とくにバランスのよい方はすぐにうまくなります。あとは転倒するときには山側に転ぶこと、まちがつて谷側に転んだときは素早くスキーを谷側に持つてくるように鍛えることです。

さて、リスクを解説した以上、次は山スキーのおもしろさを述べるのが筋でしょう。しかし、これはおもしろいからおもしろいのだ………というしかないですね。スキーはおもしろいと思います。それだけならグレンデで滑っていればよほ

ど安全です。なにを好きこのんで山の上まで歩いて登り、危険を冒して滑るのか。そもそも山登りのなにかおもしろいのかなど説明不可能です。まあ、このあたりの訳のわからないおもしろさは山岳会の方ならわかるでしょう。

山スキーヤーの間では「パウ中」ということばがあります。パウダースノー中毒です。新雪のカフ力は滑ると浮揚感がなんともいえない快感です。最近のスキー板の進歩で新雪を滑ることはごく容易になってしまいました。昔はこのために技術を磨いたのに無駄になった気がします。「パウ中」は山スキーのひとつの楽しみといえるでしょうが、これにはいっそうの雪崩のリスクが付いてきます。

さらに最近はお岳の頂上から滑るくらいは日常茶飯に行われるようになりました。鹿島槍北壁や滝谷、北岳バットレスでも雪さえあればどこでも滑られているようです。いよいよ危険な世界だと思えますが、こうしたエクストリームスキーも山スキーのひとつの方向性のようなのです。若い現役の諸君は技術を磨いて挑戦してはどうでしょうか。

2006.5.14

駆り立てられるもの

和田城志

八十八歳の母の介護のため、一カ月に八日間の高知暮らしが始まって一年になる。会社はよく休ましてくれていると思う。当然、誠にやってしかるべきだが、小さい会社でそれなりに必要とされているのだろう。安い給料が一段と少なくなつて、ヨットの維持もままならん。まあ、暢気な身分と言え、言えないこともないけれど。この休暇を活かさねばと考え、ノートパソコンを高知に置いて、原稿書きに励もうと思った。「剣沢幻視行」のための資料はほとんど集めたし、インタビューも幾つか録音したし、資料を読みながら原稿も300枚ほど書き溜めたが、新たな資料が出てくるし、書きたいことが増えてきて、ゴールはは

るか彼方、遠のくばかりだ。もう一つの評論というか伝記というか、ハロルド・ティルマンと今西錦司の比較論を書こうと準備していて、こちらも資料集めを始めた。ひょんなことで、大阪山の会の大西保さんから貴重な蔵書を借りることができた。彼は、知る人ぞ知る山岳探検関係の洋書コレクターで、膨大な外国文献の蔵書の中にティルマンが著した書籍やティルマンに関する著書が収集されていた。ほとんどがケンブリッジ大学出版版であるが、それらのすべて約20冊程が今私の手元にあり、高知で少しづつ読もうと意気込んでいた。

ところがである。母の介護も執筆も翻訳もすべて吹っ飛んでしまった。たまたま集まったミニ同窓会で初恋の人に出会い、ピクニック、宴会、花見と青春時代に逆戻りしてしまった。彼女たちの絵を

描いたり詩を書いたり、心はそぞろで勉強や介護などそっちのけ、女と酒の遊行三昧（大袈裟な）、ヨットで高知に帰省して、姉たちに介護を真剣にやる気はあるのかと非難される始末。どこに幸せが転がっているか、思いも依らないことで、母の認知症に感謝する毎日である。確かに僕は転んでも、ただでは起きないタイプだ。人生最高の一年であったと言いたい程だ。幸福、希望、夢、言葉は色々だが、人生を設計するに当たって、人はこれらに目標値を与え構想する。この一年の充実した日々がもたらしたものは何だったであろうか。

（筆を止めている振りして忍び笑い）

実は何もない。何もないのは当然で、私は人生設計と言うものをもったことがなく、いきあたりばったりで刹那的に生きて来たから、

今に始まったことではないのだ。気が付けば、ランタン・リルの頂上で感じたあの感動（いや、正しい言葉ではない。エクスタシー、ナチョラルハイ、ニルヴァーナ、叫びたいような涙が止まらない興奮、身体が浮遊するような快感）は跡形もなく消え失せて、いったいどこに行ってしまったのか。ヒマラヤのいくつかの頂で、剣沢大滝で、氷雪の峰で感じたあの興奮はもう手に入ることはないのか。アルピニズム、駆り立てるものとはいったい何ものなのか。冗談で山を登って来たはずではなかったのに、今の生活にはまったく見当たらぬ。

ぬるま湯のような快楽に身を沈めている喜びは次第に息苦しくなってくる。このまま諦観と安住の中で自足してゆくのだろうか。駆り立てるものの正体は理解しているが、駆り立てられる我が心が分

からない。いったい、何をどうしたいのか、衰えつつある肉体と根気の失われた精神が慰め合っている。もとより、目標と言つべきものはない。目標とおぼしきものも霞んで遠のくばかりで、妄想ばかりが膨らんで行く。妄想で自分を慰めることは悪くはない。しかし、禿げでぶ、アル中、リストラ直前の私が青春であろうはずはなく、ましてや、初恋の人（彼女は人生やり直すに十分過ぎる美貌をもっている）とどうなる訳でもさらになく、ただ鬱々として享楽の日々を過ごしているにすぎない。

（満足は好奇心の棺桶だ）

「青春は失われた国だ。そこには不安の道、幻覚の宿屋、苦悩の城、空中楼閣の宮殿、危険な初恋の場所などがある」とイブ・モンタンは言うが、青春とは、駆り立

てられる何かによって、それらを克服して行くその過程そのものだ。白秋こそ失われた国だ。頼るべき駆り立てられる何かがない。経験は生存の技術を高めて危険を回避させるが、危険の裏側に潜む快楽は見落としてしまう。無鉄砲の躍動感も失ってしまう。ただ青春もどきを楽しみながら、青春とは似ても似つかぬ平安に酔っているだけなのだ。

「希望は不幸な人間の第二の魂である」（ゲーテ）と言うなら、失望は幸福な人間の第二の魂と言うことになりはしないか。駆り立てられるものの記憶もなく、来し方を後悔と愚痴で過ごして来た人間こそが幸福なのかもしれない。そういう人に限って、「人間の幸福は自由の中に存在するのではなく、義務の甘受の中に存在する」（アン・ドレ・ジイド）とでも言い出しそ

うだ。私なら「その通り、自由は悪徳の中にいることを好む」と皮肉を言いたくなる。確かに不幸は自分で作ることが多いが、幸せは向こうからやってくるこの方が多いような気がする、それも突然に。

（不幸の原因は僕にあり、
幸福の理由は君にある）

アルピニズムの世界を垣間見た我々は何をしても満足することができないで、何かを求め続けている。そういう意味で、「恋における貞節とは、欲情が怠けているだけだ」（アンドレ・レニエ）の言葉はまったく正しい。我々は訳知りになつてはいけない。もつと欲望に忠実でなければいけない。知性と理性の不足が青春の特権であるのなら、知性の慢性的な不足は仕方ないとしても、理性的に生きて来た我々はもう少しハメを外してい

いのではないだろうか。アルピニズムはそう励ましてくれているような気がする。

青春の特徴は肉体にあると思う。サミエル・ウルマンの「青春とは」（新井満訳）はベストセラーでちよつと感動してしまつたが、精神性を強く出しすぎていて、逆に人生すべて気分次第で青春つてな具合に理解されそうで（実際そうかもしれない）、青春がのつぺらぼうになる危険性がある。心が求める以上に身体が求める、そういう行為、青春はやっぱり初恋だ。そういう意味で、初恋頂は象徴的だ。未経験な何かに出会い、新しい体験をするその過程そのものが青春だと言える。青春は満たされないものの中に存在する、と言えるのではないだろうか。とすれば、青春を謳歌すると言う言葉は、青春が終わった者が思つ郷愁に過ぎないことになる。

(青春は三つの言葉で表せられる、
僕、君、恋)

話が恋なのかアルピニズムなのか分からなくなってきた。つまり、熱中できる何かが欲しいのだ。欲得打算望みなし、前後不覚無我夢中、妄想朦朧五里霧中で、なりふりかまわず突っ走りたい。そういうものがどこかに落ちてないだろうか。知識があり、思いやりや物事を見通す才覚があつて、つまり分別があつて、己を律することができたとしても、青春のオルガズムは手に入らないのは百も承知、利性と痴性ばかりに飼い馴らされた大人の社会を脱皮して、青春の荒海に再船出できないものだろうか。

私がよく使う造語で「肉体の作法」という言葉がある。今西とティルマンを比較してみると、肉体

の作法に殉じたのはティルマンの方だ。晩年の両者における、今西の三角点漁りとティルマンの高緯度海域の小型帆船航海とは、肉体の活躍する比重にかなりの差がある。同時代に生きた二人は全く違う登山思想を持っていたように思う。家庭と社会的地位と尊敬を勝ち得て、ベッドで死んだ知の巨人今西と、独身で人嫌いで驚愕の人生を歩み、南極の海に消えた孤高の探検登山家ティルマンと、その対比は象徴的だ。駆り立てられるものは、精神より肉体に作用する方がよりピュアーな感じがする。二人の登山家人生を考えていると、そこにぶち当たる。

(精神は肉体を役とするのに、
肉体は精神に頼らない)

アルピニストはコンダクターより第一バイオリン、ディレクター

より主演女優であるべきだ。私の好きな登山家の一人である古川正博は、かつて「自分を一個の芸術作品たらしめたい」と言った。ティルマン職人であつた彼の山に対する一途さがそう言わしめたのである。恥じらいもなくそう言える真剣さが眩しい。

三角点の登頂回数であつたり、最高峰の最年長記録であつたり、最短時間登頂であつたり、既に登山とは言い難い末期的症状が話題になる昨今、私は偉大な先人たちに寄り添うことで不快感を静めている。山が変わつたのではない、人が変わったのだ。彼らのように真つすぐな瞳で山を眺めていたい。私の身体と好奇心は山で鍛えられた。書斎に山積みしている山岳図書や航海記が私を誘う。色ぼけている場合じゃなからう。駆り立てられるもの、それは心に浮かんただけではだめだ。肉体に語らさ

なければ意味がない。しかし、肉体の独善であつてはならない。山登りの主人公があくまでも山であり、初恋の主人公があくまでもマダム・パステルであるように。

西行は詠う「吉野山去年のしをりの道かえて まだ見ぬかたの花をたづねむ」、吉野山を自然に、花を駆り立てるものに言い換えれば、西行の気持ちに近づけそうに思う。この大自然、いままでは違つた視点ややり方で、まだ見たこともない山や海を尋ねてみたい。きつと素晴らしい世界に出会えるにちがいないと。

(山海に学びし体を持ちてより
才無き憂き身を嘆かざりけり)

06年5月20日・

山岳写真

フォト・ジェニツクとは？

小林 深

山岳写真を始めてもう8年も経ちました。最近はまだ思うような写真が撮れなくて一寸中だるみと言うか、足踏み状態になっています。そんな時に、土門拳の本を読んでいます。そんなような記述に出会い、少し考え込んでしまいました。

「カメラのメカニズムによる、自然な肉眼の印象以上の、或いは以下の写り方、それがいわゆるフォト・ジェニツク効果と言われるものである。……中略……」

ぼくたち職業写真家の場合は、ある一つのモチーフから引き出せるフォトジェニツクな可能性が、一枚一枚の写真として、時間的にも空間的にも際限なく目に浮かんでくるのだ。」

カメラの「メカニズムによる効果」とは、シャッター速度とか絞り、レンズの長短、カメラアングルやポジション、被写体との距離などにより、肉眼で見ている印象とは大きく



異なった印象に写ることを云います。例えば降っている雪を高速シャッターで写すと白い点となりますが、スロースシャッターで写すと白い線になって写ります。また、同じ被写体を同じ画角で撮っても広角レンズと望遠レンズとでは、印象がガラリと変わってしまいます。そうした効果により、実際に見た以上の素晴らしい印象を与える写真が撮れたり、逆になったりします。それをフォトジェニツク効果と云っています。それは一寸カメラをやった人なら誰でも知っていることですが、この文章を読んで、改めて色々考えさせられてしまいました。

振り返ってみて、非常に感動した風景は決してその通りには撮れませんでした。その通りどころか、プリントされた画像を見たときにはガツカリさせられ、大いなる落胆ばかりしていました。感動した印象とは、はるかに及ばない写真しか写っていないのであります。その度に、腕の未熟さと写真の難し

さを痛感させられました。それでも現場を見ている人には、多少は良い写真に見えるらしいのでした。

感動を呼ぶ風景とは、自然の作り上げた完璧な芸術品なのだと思います。人間による下手な小細工など入り込む余地は残されていないのかもしれませんが、カメラによるフォトジェニツク効果が入り込むと、折角の完璧な芸術品を壊してしまうのでしょうか。

写真とは、如何なるフォトジェニツク効果も排除して、そのままその美しさを再現することは原理的に不可能なのであります。人間の目玉は水平に二個付いていますが、カメラは単眼であります。単眼では二次元平面に圧縮した平面像となります。それだけで、見た通りのままの印象は印画紙上で再現不能になってしまいます。ですから、決して感動はそのまま再現されません。まったく同じ感動を得るには、三次元空間でまったく同じ情景を再現しなければならぬのです。ですから、実際はもともとと凄かったとなつてしまい、撮った本人には物足りない作品にしか見えないのです。

フォトジェニック効果を一切排除して撮ることが出来ない以上、自分が受けた印象のままを再現したいと思うことが、もしかしたら間違っているのかもしれませんが。ところがプロ写真家の手になると、フォトジェニック効果を使って、完璧な風景であつても実際に見た以上に素晴らしい印象を与える作品に仕上げてしまいます。しかし、それは実際に見たままの情景とは異なる美しさを引き出した作品なのであります。

一方では、大して感動のなかった風景、ついでに撮ってしまった風景をプリントして、全く予期しない素晴らしい写真が写つていて、ビックリさせられることがごく稀に起きます。フォトジェニック効果によって、思いもよらない映像がフィルム上に結像していったのであります。それは結果を予測して撮ったものではなくて、技術の下手さから偶然に生まれたフォトジェニック効果の賜物なのであります。

アマチュアにとって完璧な風景をそれ以上で写すことは至難ですが、完璧でない風景の場合はフォトジェニック効果がバカ当た

りすることがごく稀に起きるようなのです。その結果として、隠れていた美しさが前面に引き出されてくることが起きてしまうのです。

重いカメラを担いで何度山を登つても、素晴らしい光景に出会えることなど滅多にありません。一度もシャッター押さずに、欲求不満を抱え込んで山を降りることもしょっちゅうです。感動する風景だけを追いかけたのでは、滅多に撮れません。したがつて、フォトジェニック効果を駆使することにより、モチーフに潜んでいる美しさを引き出す能力が写真の決め手になるわけです。

反省するに、私は結果をイメージすることなしに、失敗を恐れて条件を振り回して撮っていたのであります。一枚一枚にハッキリした意図が入っていないかかったのです。とくに、海外に出て二度と出会えない風景だと思つと、どうしてもいろんな条件で撮つて、外れのないようにしたいとやたらと沢山撮つてし



まいます。その結果、何の面白味もない写真がフィルム一本続いていてガツカリさせられることが毎度のごとく起きていました。コレでは腕が上がる筈ないと大いにハンセイさせられた次第です。

写真とは真を写すと書きますが、写真の場合の真とはそのままの情景ではなくて、そこに潜んでいる美を引っ張り出して写すと云うことなのだと思います。雄大な山々を前にして、条件変えてシャッターを押すだけでは、それは創作行為（芸術）でなくてコピー行為になってしまいます。写真はコピーでなく、イメージした美を抽出し、印画紙上に創出する芸術なのだと認識し直した次第であります。

これまで下手な鉄砲もタマには当たる式で偶然に頼つて撮つていた私の写真は、芸術活動ではないのであります。とは云つてみたものの、そんな難しいことが果たして出来るのヤロカ???と思うと絶望的な心細さを感じています。

総会が開催されました！

2006年4月22日弥生会館にて、今年も30余名の出席の下、総会が開催されました。幹事役員の改選も行われ川勝会長は、留任にて副会長が長年勤めていただいた藤本氏が顧問となり、伴明氏、小笹孝氏の2名が副会長となりました。

伴氏の挨拶では、山岳会で今一度8000M峰への挑戦をしてはどうかと提案がありましたが本人はBCまでとのおまけ付きでありました。皆さまなりの参加のあり方を御検討下さい。

なお、会計が小松稔さんから上田忠士さんになり会費の口座も下記に変わる事になりましたのでよろしく願います。記号：14020 番号：38156801 口座名：大阪市立大学山岳会
(会費は山岳部OBは年間5000円、賛助会員は年間3000円)

幹事長ご挨拶

2006年4月22日

佐藤 一良

会員の皆様今日は。

本日は約30名の会員と現役部員の方々がお集まり下さいました。ありがとうございます。幹事の方から昨年度の活動報告と今年の予定を話していただきますが、私から全体的な状況を説明させていただきます。

登山という素晴らしい行為に魅せられ、大阪市大山岳部に集い、卒業して山岳会会員として年齢を重ねてきた仲間の方々は今も大自然の中で人生を楽しんでおられます。海外ではネパールヒマラヤ、ヨーロッパアルプス、ニュージーランドなどに遊び、国内では北アルプス、中央アルプス、大台・大峰の沢登り、東北の山々、南九州の山々、又梅池をホームゲレンデとする4回にわたるスキー合宿など地球を舞台にして熟年パワーを発揮しています。

特に仕事をリタイヤされた60歳台の方々の元気さが際立っています。その為の体調の管理も徹底しておられ、いまだに禁煙の出来ない私は肩身の狭い思いで仲間に入れてもらっています。後ほど詳しいお話を聞けるとおもいます。

一昨年の宮崎君に続き、9月には山岳部部長の小林君、今年2月には私と同期でカンジロバの隊員であった諏訪ドクターが病気のため亡くなりました。7月には広谷東京支部長が脳血管障害、2月には私が腹膜炎、3月に伴さんが硬膜下出血と大病を患う会員が続きました。つくづく健康の大切さを考えさせられた一年でした。

ヒュッテ雪線は賑わっております。ただ気になるのは120名程の会員の中で雪線を訪問してくれたのは30人程に過ぎないという事です。せめて半数の60名の方々が山小屋生活を楽しんでいただけるよう皆さんのお知恵をお借りしたい。良い案がありましたら雪線を担当していただいている久保田さん、中嶋さん、兵頭さんに連絡をお願いします。また来年が設立10周年ですので記念イベントを開催したいと考えています。そのための準備委員会を6月に発足させたいと思います。

現役は法学部の関君が卒業して山岳会員となり、現在7名です。新入部員勧誘に頑張ってくれていますが入部者はまだいないようです。吉報が待たれます。山田さん、佐々木さん、伴さんが中心になって育ててくれています。

さて今年の予定ですが企画運営幹事の方から説明があると思いますのでそちらに譲ります。

とにかく皆さんくれぐれも健康に留意され、70歳-80歳まで大自然の中で一緒に遊びましょう。

ありがとうございました。

平成17年度 活 動 報 告

時 期	活 動 内 容	参 加 者
5月3日～5日	鹿島槍 天狗尾根	佐々木・山田・兵頭・(吉村)
6月中旬	木曾駒 (新人歓迎登山)	伴・佐々木・佐藤・山田、現役4名
7月12日～31日	グリンデルワルト、ツルマツ周辺の山々	佐々木・上田夫妻
8月初旬	現役夏山壮行会 於大阪市内	現役・OB多数
8月12/13日	大杉谷 堂倉谷遡行	伴・佐々木・山田・
9月初旬	台高 本沢川上流黒倉沢遡行	伴・山田
9月17～19日	中央アルプス 太田切川遡行	伴・山田、現役2名
9月30日～10月3日	ヒマラヤ メラピーク登頂他	佐々木・関(現役)
10月中旬	台高 石ヶ平谷から薊岳へ	上堂・伴・上田・山田、現役3名
10月29日／30日	大峰 ノウナシ谷 遡行	伴・山田、現役3名
11月下旬	京都 金毘羅岩登り	小笹・伴・岡本・佐々木・山田・ (苑樹・吉村)、現役3名
12月20日	現役冬山壮行会 於大阪市内	現役・OB多数
2月17日～19日	大山 登山とスキー	山辻・伴・上田・島川・山田・澤田・ (吉村)、現役3名
3月4日	比良山 堂満岳東澤	佐々木・山田、現役3名

諏訪君を偲ぶ

藤村 達夫

それは突然の連絡でした。2月も終わり頃、高校時代からの友人の竹村から自宅に電話があり、先程諏訪の奥さんから諏訪が亡くなったと、連絡があったと伝えた。えー、まさかと絶句した。

私と諏訪真一さんとは大阪府立天王寺高校の山岳部で同期生として3年間過ごし、最初工学部志望の諏訪さんは一年浪人の後志望を変えられて、大阪市立大学医学部に入学。そして山岳部に私の後輩として入部されました。

高校時代の山仲間6人とは毎年12月に忘年会を兼ねて旧交を暖めるのが慣わしで、昨年(2005年)12月にもいつもの場所に集まった。幹事役によれば、そのときは諏訪の返事は調子が良ければ来るし、悪ければ来ないという事であった。結局、諏訪は来なかった。仕事先には毎日通っていると聞き、彼が来なかったことをそれほど深刻に受け止めた者はいなかった。

一昨年(2004年)の同じ集まりの時、諏訪は突然、杖を突いて現れ、我々山仲間を驚かせた。整形外科医の彼がどうしたのか、訝った。私はちゃんと認識しなかったが、後で知ると、前立腺がんの影響によるものらしかった。

諏訪とはこの時、一昨年の12月の高校時代の山仲間の忘年会でお会いしたのが最後になった。

私とは高校時代は同級生、大学の山岳部は先輩、後輩の関係で、彼は律儀に、高校の仲間の集まりでは、呼び捨てに、大学の山岳部の集まりでは、私をさん付けにする気配りをしていた。

高校時代、山岳部が毎年、大阪府高体連のスキー大会に学校代表(スキー部は無かった)で出ており、諏訪だけはそれまでの経験から、回転競技に参加、我々は体力だけで、距離のリレーに参加。府外出身者を入れた某私立高校に歯が立たなかったが、学校の授業を公に休んで、当時雪深い、神鍋の民宿泊は楽しかった。

大学時代、諏訪は我々商学部と違って忙しい、医学部の勉学の傍ら、山岳部の活動をし、医学部のラグビーに所属していた。当時市大の医学部授業料は公立大学故、私学のそれより破格に安く、それを理由にご母堂より小遣いをせしめると話していた。その恩恵にあずかったのは私だけではない。

お通夜の席でお母上にお会いした、私の母より、随分お若い。何年か前、大学の同じゼミの友人も母親を残して先に逝った。世の無常を痛切に感じた。しかし、諏訪も素晴らしい息子さんを残した、遺族を代表してのりっぱなご挨拶に、感銘を受け、諏訪君、心配いらん、後は息子に任せと思った。なお、諏訪さんは大阪市大山岳部のカンジロバヒマール遠征隊のドクターとして足跡を残されました。

合掌

藤村達夫

編集後記

山岳部出身の諸兄は、一般的なスポーツクラブの合宿は経験されたことがないであろう。フィールドでの練習を終えれば快適な風呂とエアコンの効いた部屋でくつろぐ……。山の中ではありえない空間だ。ところで、近頃の中学生も高校生も食べ物の好き嫌いが驚くべき状況になってきているのをご存じだろうか。今夏、高校の運動部と文化部の両方の合宿に参加したが、どちらでも野菜を食べられない生徒が数名。大手銀行の支店長の子もいるが、親はいったい何を食べさせているのだろうかと思いたくなる状況であった。野菜を箸で切り刻んで、ドレッシングの海に泳がせて飲み込むのである。田園風景が広がる合宿先の食事は鍋ものや定食でももちろん野菜がたくさん盛りつけられている。野菜嫌いの生徒に完食つきあうと最低1時間はかかる。まるで大食い選手権の決勝ラウンドの様相である。牛歩という言葉があるが、これは牛食だ。あまりの遅さに書物を読みながらつきあうことにした。

彼らは、空腹の極限の状況である飢えを経験していないからなのだろうか。そうだ、奴らを登山に連れていき、8時間ぐらい何も食べさせず歩き通して飢えの状況に追い込み、下山後は野菜炒めとご飯だけを用意しておく……。

「野菜嫌いが勉強嫌いをつくる」などという馬鹿げた本を偉い学者が出してくれないだろうか。そして、「登山が野菜嫌いをなくす」とセットにしてくれれば、現役部員確保もより可能性が高まるのではないか……。

牛食の合間のうたた寝でこのような妄想に耽った。

それにしても、健康と学力は、好き嫌いに反比例しているような気がするからなおさらほうっておけない気がする。(八)

山岳会 (OB 会) URL

<http://www.happy.net/OCUAC/index.htm>

現役 URL

<http://www.ocuac.com/pctop.html>